

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意

清熱剤 清臟腑熱剤 23

はくとうおうとう 白頭翁湯	清熱解毒・涼血止痢	白頭翁 15g・黄柏 12g・黄連 4~6g・秦皮 12g 水煎し服用する。
傷寒論	<p>&lt;主治&gt; 熱毒痢 発熱、腹痛、裏急後重（テネスマス）、肛門の灼熱感、膿血性の下痢、口渇があり水分を欲する、舌質が紅、舌苔が黄、脈が弦数などを呈す。</p> <p>&lt;病機&gt; 熱毒が腸に停積し、血分に深陥して膿血下痢を引き起こした状態である。 熱毒が血分を燻灼して膿血に化すので、<b>血便を主体にした膿血便</b>（赤多白少）が生じる。熱邪が気機を阻滞するために<b>腹痛、テネスマス</b>がみられる。熱毒が肛門に迫ると<b>肛門部の灼熱感</b>が生じ、津液を下迫するので<b>下痢</b>になる。裏熱が盛んであるために<b>発熱</b>があり、津液を消耗するので<b>口渇があり水分を欲する</b>。舌質が紅、舌苔が黄、脈が数<b>は熱盛を、弦脈は気滞、疼痛を示す。</b></p> <p>&lt;方意&gt; 熱毒深陥血分による膿血下痢であるから、清熱解毒、涼血によって止痢する。 清熱解毒、涼血の<b>白頭翁</b>が主薬で、清熱解毒の<b>黄連・黄柏</b>が補助する。さらに、清熱、収澀止痢の<b>秦皮</b>を配している。4葉はすべて苦寒で清熱解毒に働き、熱毒を清解することにより止痢の効果が得られる。</p> <p>&lt;参考&gt; 本方（<b>白頭翁湯</b>）と<b>芍薬湯</b>は、いずれも下痢に用いるが、 本方（<b>白頭翁湯</b>）は熱毒痢、すなわち熱毒深陥血分による膿血便（赤多白少）に対して清熱解毒、涼血に、澀止を兼ねた方剤であり、<b>芍薬湯</b>は湿熱痢の気血壅滞による膿血便（赤白）に対して調和気血、清熱解毒し、通因通用に清化を兼ねた方剤である。 現代医学的には、<b>急・慢性細菌性下痢、アメーバ赤痢</b>の熱毒内盛に用いる。</p>	
はくとうおうかかんぞうあきょうとう 白頭翁加甘草阿膠湯	清熱解毒・涼血止痢・養血滋陰	白頭翁湯 + (阿膠 9g・甘草 3g)
金匱要略	<p>主治は、産後血虚の熱痢 <b>白頭翁湯</b>に養血滋陰の<b>阿膠</b>と解毒の<b>甘草</b>を加えて、産後血虚に適応させている。産後に限らず、血虚、陰虚を伴う熱痢に用いるとよい。</p>	
かみはくとうおうとう 加味白頭翁湯	清熱燥湿・涼血止痢・緩急止痛	白頭翁 9g・秦皮 6g・黄連 6g・黄柏 6g・白芍 6g・黄芩 9g 水煎し服用する。
温病条弁	<p>主治は、湿熱痢 本方（<b>加味白頭翁湯</b>）は、<b>白頭翁湯</b>と<b>黄芩湯</b>を合方し、<b>甘草・大棗</b>を除いたものに相当する。</p>	